

ふくととう

平成14年4月1日 発行

創刊号

第18回福井県糖尿病協会総会 および講演会報告

第18回福井県糖尿病協会総会および講演会は、福井県立病院福糖会の主管で平成13年11月18日(日)午後1時30分より5時まで福井県自治会館2階多目的ホールを会場に開催されました。以下にその概要を記します。



福井県糖尿病協会会長が欠席されましたので、主管の福糖会副会長の開会挨拶で始まりました。

1. 総会。笈田福井県糖尿病協会専務理事が(1)庶務及び決算報告、(2)事業予定及び予算案の提案を行ない、それぞれ原案通り了承、可決されました。
2. 講演会は、齊藤荘二福井健康福祉センター福祉課長を講師に迎え、福井県立病院若杉医師の座長で、『心の運転とゆとり』を演題に行なわれた。初めはユーモアに笑いが出たが、次第に自分の言葉を振り返りながら静かに聞き入った。
3. 病院友の会活動報告。8つの分会より報告された。スライドを使用しない予定であったが、プロジェクターを持参した病院とパソコン出力を映写した病院があった。(以下は報告の抜粋) 済生会病院…機関紙の発行、総会(講演会、バイキング)、ハイキング(陶芸体験)；赤十字病院…ポスター、機関紙の発行、総会、糖尿病教室；社会保険病院(あゆの会)…目についての講演会、ハイキング、座禅体験、バーベキュー、おせち料理によるバイキング；国立療養所敦賀病院(さくら会)…講演会、外食の勉強会、食事会、ポジティブシンキング(これだけしか食べられない→こんなに食べられる)の精神でがんばります；池端病院…新年会、糖尿病教育、介護保険についての講演会、調理実習、ピクニック；木村病院(糖克会)…バイキング形式での食事指導、講演会、総会、竹細工、料理教室、機関紙；春江病院…月1回の研修会、俳句、



茶会、誕生会、木工細工、食事会(懐石料理、フランス料理、おせち料理)；尾崎病院(タンポポ)…ハイキング(歩こう会)、バーベキュー(和泉村)、カレーライスゲーム(食事療法をいかしたゲーム)、「ボケない音頭」、寸劇による糖尿病教育など

4. 展示。次の9つの分会が活動内容を紹介する展示を行なった。福井医科大学3内(医糖会)、済生会病院(済糖会)、赤十字病院(糖友会)、社会保険病院(あゆの会)、国立療養所敦賀病院(さくら会)、池端病院(糖池会)、木村病院(糖克会)、春江病院(糖和会)、尾崎病院(タンポポ)、病院栄養士協議会。さらに、企業6社が、血糖測定器や治療薬などを展示した。
5. 参加は13の医療機関分会と福井県病院栄養士協議会分会で、総数141名でした。病院毎の参加人数は、福井医科大学3内(医糖会)6名、済生会病院(済糖会)25名、赤十字病院(糖友会)13名、社会保険病院(あゆの会)7名、国立療養所敦賀病院(さくら会)16名、池端病院(糖池会)19名、木村病院(糖克会)13名、春江病院(糖和会)7名、尾崎病院(タンポポ)3名、笠原病院5名、福井総合病院3名、小浜病院5名、福井県立病院19名でした。
6. 福糖会会長の閉会挨拶で全ての予定を終了しました。皆様の御参加、ご協力に御礼申し上げますとともに、不手際につきましては何卒お許しただきたくお願い申し上げます。



(文責 福井県立病院内科 若杉)

はす坊からの手紙

～第16回(平成13年度)福井県糖尿病協会会員交流会でお会いした皆様へ～

ハイ、こんにちは。僕は、南条町にある「花はす温泉・そまやま」のマスコットボーイ“はす坊”です。

平成13年5月26日(土)の第16回福井県糖尿病協会会員交流会では、来てくれて本当にありがとうございました。お天気も良く(暑いくらい!?),とっても楽しかったですね。参加人数はなんと185人!今回の交流会担当の糖池会(武生:池端病院)の皆さんも総動員で、大変賑やかでしたね。はじめてお会いした事務局長の筈田先生の挨拶にもあったとおり、もう今年で毎年定例での交流会は行なわれなくなると聞いて、ちょっぴり寂しい気もしましたが、参加された会員の皆さんの明るい笑顔と笑い声に、ルンルン気分でいつの間にか引き込まれてしまいました。



ところで、福井県の糖尿病友の会って数多くあるんですね。伝統ある先輩格の会から、発足ホヤホヤの会までが大集合。福井県内にもこんなにたくさんの会が活動されていると知って、ビックリしちゃいました。改めて糖尿病患者数の増加と、それに伴った友の会の必要性を痛感させられました。僕もこれからは、食事や運動などの生活習慣に気を配らなくちゃ。

そうそう、「はす染め体験」をした皆さん、はす染めはいかがでしたでしょうか?ハンカチとコースターのどちらにしようか迷ったのだけど、僕はハンカチを選んで、家族へのお土産にしました。結構、

評判がよかったんですよ(えっへん)。そして、僕が一番張り切ったのはやっぱり全員参加のゲーム&クイズの時かな。白熱したボール送りゲームでは、負けたチームの罰ゲーム(ブタさんやおさるさんのモノマネ)には、思わず吹き出してしまいましたよ。その他、体操・楽しく学べる糖尿病ビンゴゲーム・糖尿病替え歌などなど、盛りだくさんの内容で、本当にアツという間に時間が過ぎていってしまいましたね。



実は僕、今までは、「糖尿病=怖い病気」というイメージがあったのですが……。イヤイヤ失礼、会場内では全くそんな雰囲気は感じられず、むしろ僕の方が元気パワーを分けて頂いた次第です。「糖尿病と共に生きる」皆さんの姿勢と、会員相互で励まし合い理解し合う交流会にとっても感動した一日でした。

今、僕の家の中には、記念品で頂いた武生市の花「菊の苗」が植えてあります。今では立派に成長しています。秋にはかわいい花が咲きましたよ。これからも、ちゃんと世話を(会員の皆さんが毎日しっかり自己管理されているのを見習って)来年も立派に花を咲かせたいと思っています。

またいつかお会いしましょう。

糖池会(池端病院)



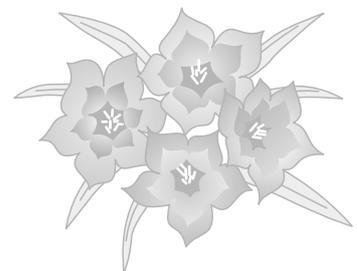
「高齢者の糖尿病」

中井内科医院 中井 継彦

日本人の平均寿命が徐々に延び、過去最高になったことが、最近発表された平成12年簡易生命表により明らかにされました。男77.64歳、女84.62歳です。寿命が延びた要因として、心疾患、脳血管疾患などの動脈硬化にもとづく病気による死亡率が改善したことも関与しています。動脈硬化を生ずる危険因子として糖尿病が重要です。加齢とともに糖尿病の頻度が増加することと相まって、当院でも高齢（65歳以上）の糖尿病患者の割合が徐々に増加してきています。なぜ、加齢に伴い耐糖能が低下するのでしょうか？加齢に伴って空腹時血糖値は変化しませんが、食後の血糖値が高くなります。この機序として、膵臓からのインスリンの分泌は加齢の影響を受けませんが、インスリンに対する感受性が低下し、インスリン作用が減弱することが要因と考えられています。

高齢者の糖尿病は2つのタイプに分けることができます。すなわち①青壮年期に発病した糖尿病、②高齢になって初めて発病した糖尿病です。前者では罹病期間が長く糖尿病の合併症を有することが少なくありません。合併症を考慮した治療が必要です。経口剤（のみぐすり）でコントロール不良のときは、

インスリン注射への切り換えを必要とするときもありません。高齢になって発病したときは自覚症状に乏しく、多くの方は健康診断でごく軽度の高血糖を指摘され受診されます。合併症はなく、食事療法のみ、または少量の経口剤でコントロール可能です。高齢糖尿病患者の治療にあたって留意すべき点は、若年者以上に低血糖を極力避けなければならないことです。高齢者では血糖が下がりすぎても血糖を上げようとするホルモンや神経の働きが悪く、無自覚のうちに低血糖が持続し、脳の働きを悪くし痴呆様となることがあります。また、動脈硬化があるため、脳梗塞や心筋梗塞発病のひきがねとなることがあります。従って、高齢者では血糖コントロールの目標値は若年者より少し高めに設定します。（空腹時血糖値140mg/dl以上、HbA1c 7%以上）。高齢者では、肝、腎機能の低下、他の病気で薬を飲んでいることが多いこと、生活、社会環境および肉体的、精神的因子の個人差が大きいことなどより、きめ細かな診療、治療が必要です。画一的に対処することが難しいため、受診時に医療スタッフに気軽にご相談下さい。



◇新薬紹介◇

新しく発売になった超速効型インスリン製剤（ヒューマログ、ノボラピッド）というお薬について紹介します。

超速効型インスリンは遺伝子組み替え技術を使って生み出されました。超速効型？これは、従来の速効型インスリンよりも、効果の発現が速く、作用持続時間が短いことを意味しています。

現在、インスリンは食事の約30分前に皮下注射しています。これは、皮下注射したインスリンの効果が現れるまでに約30分かかるためです。ところが、超速効型インスリンは15分以内に効果が現れるので、食直前（15分以内）に皮下注射します。速く効いて速やかに無くなるため、食後高血糖の改善効果が期待できます。個々の血糖値の変動とインスリンの分泌状況を見ながら、他のインスリンと併せて用いることで、健康なインスリン分泌により近いコントロールができるものと期待されます。

福井医科大学薬学部 中村 敏明

「糖尿病というドラマ」

福井赤十字病院 内科 夏井 耕之

糖尿病は、あまりドラマにならぬように思える。

ドラマティックでないように思われている。食べ過ぎ？、太り過ぎ？、飲み過ぎ？、……往々にして「贅沢病」の代名詞のように扱われる。

かつての結核、白血病、あるいは、癌のように、「余命いくばくも」という状況に突然さらされると、人は泣いたり叫んだり、黙り込んだりしながら、それを受け容れ、あるいは拒絶しつつ、物理的に限られた「時間」を生きる。これは、或る意味ではドラマのテーマになり得る。もちろん「ドラマ」として取り上げやすい、というだけで、実際にそうなったときの大変さ、苦痛は絵空事にはできぬ。そういった「ドラマ（作劇）」をもっとも嫌うのは、本当にその病気にかかった人たちであろう。

それにしても、糖尿病はドラマにならない。食べ過ぎるな、運動を定期的に行え、ちゃんと薬を飲め、……そういった暮らしは、たとえば「金曜ドラマスペシャル」や小説の舞台にはなりにくいと思われている。

障害は、徐々に、目に見えぬ速度で進む。「限られた時間」というドラマチックな要素も無い。日々の暮らしに、「闘病」という大上段に振りかぶった「たたかい」もない。

しかし……実は「日常の中の細々とした闘争」こそが、真の人間ドラマではないか、と、最近思っている。

たとえば、「食べる」ということは、人間（動物）にとって最大のテーマではないか。それも、グルメとかいかもの食い、文化の多様性などといった「記事になるネタ」ではなくて、ごく普通の、毎日の、繰り返され積み重なる「食事」こそが、本当は「人生の大事」であると思う。今、ここに、目の前のおいしそうなお菓子。今、ここでの会食。今、この耐えられない「飢餓感」。この「今、ここ」における心理的葛藤は、糖尿病患者にとっては、未来の人生の質を分ける「のるかそるか」なのである。たとえ、

その時その場では、そうと分からないとしても。

福井の空は、今日も気まぐれだ。さっと晴れ渡ったかと思えば、にわかには粉雪が舞う。それは薄く降り積もり、すぐに溶け、その上からまた風に舞いつつ白いペールが降りる。

糖尿病患者の人生も同じだ。つい、食べる。血糖が上がる。いかん、と思う。かっとなる。注意する。うまくゆく。血糖が下がる。あ、っと思うと低血糖も起こる。寒風が行く。水がぬるむ。花は咲き、葉は緑を濃くし、やがて真夏の太陽が射し、黒雲が湧き起こり、雷雨が襲い、木々は色づき、また、曇天にみぞれが混じり。そうして、繰り返えし、繰り返えし、日々は行き、その積み重ねの果てに、糖尿病患者の人生は織り成され、あるものは無事一生を終え、あるものは途上で躓く。

確かに、今、ここでは、痛くも痒くも無いかもしれない。しかしいつかどこかで、あなたも（私も）躓くかもしれぬ。そうして、今ここに得られる「満足」……自由に食べ、好き勝手に生きる……に比べて、遥かに大きな自由を失うかもしれぬ。それは、「手かせ足かせのある人生」「爆弾を抱えた人生」「綱渡りの人生」である。

それはどこから来たか。誰も好き好んで病を得るわけではない。それは、「遺伝」とか「体質」とかという、厄介で如何ともし難い要素であるし、「生活習慣」といってもそれほど（糖尿病でない）他人に比べて劣ったやり方をしていたわけでもない（はずだ）。なぜ、自分だけが……。私だけがこんな「綱渡り」をさせられる？。

「もっと不幸せな人もいる、もっと悪い状態の人もいる」と考えても、役には立たぬ。「下を見て自分を慰める」考え方はろくな発想を生まぬ。

そうではない。

主人公は自分以外にいない。この「綱渡り」を、「手かせ足かせ」を引きずりながらの人生を、どう生き抜くか。それは、自分自身の、自分だけの、自分にしか聞えない。サバイバルとは、生き延びる意志のことである。

一生を、この枷（かせ）を引きずりつつ生き抜いてゆく。他でもない、他と比べることも、他と入れ替えることもできない、この宇宙で、唯一、絶対無二の、この「私」の人生。恋愛も、憎しみも、いつかは醒める。しかし、積み重なる日常だけは終わらない。決して醒めることはない。

これこそが、ドラマでなくて、何であろうか。

私の体験

私と糖尿病

糖友会 中井 美穂

私と糖尿病との出会いは、今から3年前でした。結婚を半年後に控え忙しい日々を送っていたときです。今まで体験したことのない急激な体重の減少、のどの渇きなどが症状として出始めました。そして、糖尿病との診断……。診断内容は、ストレスからくる糖尿病ということでしたので、摂生すれば必ず良くなると信じていました。また、私自身、糖尿病としての知識が未熟だったため、書店へ行き病気についての勉強をはじめました。知れば知るほど恐ろしい病気。でもきっと自分は、2種類ある糖尿病のうち2型の方だろうと思っていました。ところが、体重は増えず、デキモノも直りにくい状態が続きます。おかしい、もしかして私は1型？。きっと違う、きっと直る。と毎日自問自答の繰り返しをしていたことを覚えています。

病気と知りながらも主人は、今まで通りに接してくれましたし、結婚も予定通りに行いました。そんな主人の優しさに甘えがあったのかもしれませんが。体調のすぐれないことでストレスをぶち当ててしまうことがしょっちゅうでした。頭の中では自問自答でも、専門の先生に診ていただく勇氣もない。今思えば、本当の自分の病気を認めたくなかったのでしょう。認めてしまえばきっと生活に制限がでてしまうことが恐ろしかったのです。

病気になって10ヶ月が過ぎた頃、友人の結婚式に出席しました。友達である新郎新婦の幸せそうな笑顔が私に勇氣をくれました。私も笑顔を取り戻したい、今の自分の現状を受け止めてみよう。

2日後には夏井先生の診断を受けました。結果はやはり1型。一番恐れていた結果です。その日から2ヶ月の入院生活が始まりました。味気ない食事、一日4回の血糖測定と注射。同じ病気の患者さんがたくさんいらっしゃいましたが、私と同じ年の人なんていません。カーテンを締め切って家族が見舞いに来てくれるのをただひたすら待っていました。思うように血糖が安定せず、いらだちと落ち込みの繰

り返し。後から入ってくる患者さんに先を越されては、人知れず屋上で泣いていました。日常から置いて行かれたような入院生活は、ある意味私を落ち込ませただけ落ち込ませてくれたような気がします。

退院後は、できるだけ今まで通り生活をしたくて、職場にも復帰しました。病気と言うことで自分に制限したくなかったからです。仕事と家事、血糖コントロールを日々日課としているうちに、私の中で気分が楽になったことに気づきました。何が変わったのだろうか？どうして楽になったのだろうか？それは、病気を受け入れ、病気と付き合えるようになったことが理由です。入院生活で落ち込んだ分、開き直りが前向きな私を取り戻してくれたようです。血糖が高ければ次、頑張ればいい、今週は、180以下を目指すなど目標を立ててみよう、低カロリーでおいしい料理を作ってみよう。病気になったことは、とても悲しいことだけれど、それを受け入れられた自分を誉めてみよう、病気を克服とまではいかないけれど、向き合えているのです。

また、うれしいことに、昨年無事に子供を出産することが出来ました。子供を産むなんて、この体で到底無理と考えていましたが、先生のご指導、家族の支え、おなかの赤ちゃんが私の不安を取り除いてくれました。これから病気とは長い付き合いになりますが、今までの私の経験が自信にかわり支えになることを信じています。

以前、友人にこんなことを言われました。「試練（私で言う病気）はその人が乗り越えられる能力があるから神様が与えるものらしいよ。」私自身今ならその言葉にうなずくことが出来ます。うなずけることに自信を持ちたいです。



私の体験

腎症と私

医糖会 宮崎 博文

昭和57年38歳のときに糖尿病と診断され、市内の某病院に入院。しばらくは厳格に食事療法を続けていましたが、その後、若かったこともあり、多少無理もしたために管理がルーズになって、血糖も高くなり（血糖値300～500mg/dl）2～3年ごとに1週間ほどの入院を繰り返していました。また、糖尿病によいといわれるとついつい健康食品に手を出し、色々なものを使用していました。平成10年に使用していた健康食品（プロテイン系）が良くなかったのでしょうか、体の調子がおかしかったので某病院に入院。その時医科大の先生が来られるということで診察を受けました。検査の結果、「腎臓が特に悪く末期で4期の症状でもう治らない。今までどうしていたのか。こんなに悪くなっているのに……。」と言われ。即、医科大に転院しました。

それまでは、糖尿病性腎症に関して知識があまりなかったので、治らないんだと漠然と考える程度でしたが、主治医の先生の話や糖尿病性腎症の本を読んでいくうちに食事療法をしないと3～4年の命しかないという厳しいことばかりで、パニックに陥りました。このまま何もしないでは駄目だと自分に言い聞かせ、主治医の先生や栄養士の先生の指導のもと、退院後は、妻と一緒に食事療法について色々勉強しました。

最初は1食15gのタンパクと1,800カロリー（kcal）でしていましたが数値は悪くなるし疲れがひどいので、疲れはエネルギー不足と考え低蛋白食品を多く利用して15gのタンパクを10gに減らし、カロリーを1日2,000～2,100（kcal）に増やしました。その結果検査データも日に日に良くなって数値が安定してきました。

また、血糖もインスリンを最初28単位注射していましたが、エネルギーも徹底して制限、管理していましたので、主治医の先生の下2単位ずつ減らしていき現在は全くインスリンを使用していません。早ければ1年以内に透析と言われていましたが、今年で足掛け5年になります。始めのうちは病気という孤独感でうつ病になったり、献立の計算ミスで塩分やタンパクを1日の摂取量以上摂ると神経質になって妻にあたったり、糖尿病の怖さを他人事と考えていたので随分と暗く落ち込んでいましたが、適切な食事療法を続けると進行を遅らせることが出来るということが実感でき、と同時に自信とゆとりも出てきて、今では弁当を持って1泊旅行もしています。

最近少し進行し始めていますが、これまでの食事療法が自信となっていますので、例え透析を始めても透析生活を楽しくおくれる自信があります。

この頃、ますます糖尿病が治ると色々な健康食品が出回っていますが、利用法を間違えると私のようにならないとも限りません。糖尿病教室や先生方の指導のもとで利用されたほうが良いと思います。

もし機会がありましたら、次は低タンパク食の献立についてお話しします。

友の会

友の会

「中井内科糖尿病友の会」の現況報告

中井 継彦

当院は福井駅前のビルにある内科医院です。通院患者の約40%は糖尿病患者で、糖尿病を中心とした生活習慣病に、より専門特化したクリニックを目指しています。開院して約5年ですが、当初より、日常外来での患者とのコミュニケーションの足りないところを補うために、年2回の食事会、講演会及び

情報誌「健康通信」を発行しています。食事会では6～7単位の食事をお弁当またはバイキング形式で行い、季節の材料を用いて調理していただき、食材の説明とともに食物繊維の効用などにつき解説しています。講演会では「さかえ」などについて最近の話題につき、話をし、お互いに意見を交換しています。毎回患者さんのみならず、家族、友達など30～40人参加されます。「健康通信」では糖尿病Q&A、検査一口メモなどを連載しています。別ページに「健康通信」9号に記載した記事を紹介致します。

友の会

友の会

国立療養所敦賀病院(さくら会)

当さくら会では、年間2回の行事を中心に活動を行っています。当会独自の行事の紹介をします。

平成13年4月14日(土)国立療養所敦賀病院大会議室で、会員37名、家族3名、スタッフ13名の計53名で、糖尿病の合併症をテーマに竹内医師の講演はじめ食事療法、食事会を開催致しました。講演会では、腎症の怖さに落胆されたり、日頃の食事療法の大切さを再認識されたり一様にわかっているけどショックの様子でした。食事会では、ボリューム感のある弁当を当院で作成し召し上がっていただきました、ご覧の通り概ね満足されていました。ただ講演形式の食事会であったため、なごやかに交流を深めてとはいかず、少し残念であったと反省しております。

13年9月22日(土)三方町十村梨園への歩こう会を会員9名、家族7名スタッフ12名の参加で実施しました。途中JR(栗野～十村)使用し徒歩約5kmで秋深まる田園を楽しく汗を流し、梨や弁当に舌鼓をうち過ぎました。参加者からは日頃運動する機会がないので、よかったと喜んでいただきました。参加された会員さんの一句を紹介します。

木洩れ日を眩しい梨をむきにけり 江藤日出雄氏

友の会

緑会(笠原病院)

緑会実行委員

5月9日に行なわれた西山公園での緑会交流会の様をお伝えします。この日は天候にも恵まれ、満開のつつじを背景に、楽しい交流会となりました。初めにひとりひとりの簡単な自己紹介をしました。みなさん初めは恥ずかしそうでしたが、次第に和やかな雰囲気になりました。

青空の下、みんなで血糖値測定をしました。あまりの暑さに血糖測定器が壊れるというハプニングもありました。続いて、河野先生の掛け声のもと、みんなで準備運動をしました。その後、色とりどりのつつじを見ながら、園内を散策しました。本当にきれいでした。散策が終わり、お腹がペコペコ。栄養部の方々が用意して下さったお弁当をみんなで頂き

友の会

楽しかった忘年会：たんぼぼ(尾崎病院)

森下 重行

「すかっとランド九頭竜」で行われた忘年会を振り返る。

出発前の血糖値・血圧・体重・体脂肪測定、車中での頭の体操クイズ、到着して眼鏡入れ手工作。ボンド、はさみ、セロテープなどの準備や作り方指導に、スタッフの細かい心配りに感謝しながら、不器用ながらも作り上げた。頭で考え、指先を駆使しての手工作は、ボケ防止に繋がる企画と思える。

昼食は個人ごとのカロリーを考えたの弁当で、自分のカロリーを体得することを狙っての各自のご飯は自分で計量。このご飯量の体験は良い勉強になる。和泉村の末永さんの浅漬けはおいしさ抜群でこの昼食を締めくくった。

20分休んで「芋太郎」の寸劇。スタッフは顔に墨や絵の具を塗り、衣装も工夫した芋太郎や鬼たちの熱演。イヌ・サル・キジは会員から出て大あばれ。病気も忘れる抱腹絶倒のひとつきだった。

その後、温泉に浸かって手足を伸ばす。目の前には紅葉の山が迫り、晩秋の景色が湯面に浮かんでいた。



ました。(おかしをいっぱい持ってきている方もいましたが!?)。ごはんの後はゲーム大会。河野先生とジャンケンをして勝った人には、素敵な?賞品が当たりました。

実行委員として、大変多くの方々に御参加いただき、とてもうれしく思っています。参加者の方々には、再度、このような会を開いてほしいとの要望もあり、今後も交流会などを通じて、私達も緑会を盛りあげていけたらと思っています。

糖尿病「友の会」へのおさそい

ひとりで悩むのはやめましょうよ。糖尿病に負けたくない、負けて欲しくない、そう願うおおぜいの仲間がここにあります。

福井県糖尿病協会は日本糖尿病協会の福井県支部です。日本糖尿病協会は糖尿病に負ける人をなくしたいと願う患者と家族と医療スタッフの集まりです。

★糖尿病「友の会」とは？

日本糖尿病協会に加入する糖尿病「友の会」は、糖尿病患者とその家族、医師、看護婦、栄養士などの医療スタッフで作られている会です。

糖尿病「友の会」は、全国の1,400病院、診療所にあります。

★「友の会」の活動は？

◎医療スタッフと患者が定期的に催す独自の勉強会や歩く会の開催

◎月刊誌『糖尿病ライフ・さかえ』（日本糖尿病協会編集）を配布

◎患者同士の懇親会、ディスカッションの開催

◎1型糖尿病の子供を対象にしたサマーキャンプなどの開催

★会費は？

「友の会」の活動はそれぞれの会の独自性を尊重して運営されるため、会費は会によって異なります。

★御注意

個人での入会は出来ません。「友の会」のある最寄りの医療機関に御相談ください。

月刊誌『糖尿病ライフ・さかえ』は各支部（友の会）に送られます。御自宅への郵送はできません。

御 挨 拶



福井県糖尿病協会 会長 三村 訓章

新緑の候、会員の皆様方ご壮健にてお過ごしのこと、お喜び申し上げます。この度、福井県糖尿病協会の会長にご使命を戴きました、三村訓章と申し上げます。まだ若輩者でございます。皆様方に何も貢献できるような者ではないのですが、お受けした以上微力ながら、会の為、少しでも貢献出来るよう頑張りたいと思います。

私は、三年前に福井医科大学に他の病気で入院しました。ところが、検査の結果、病気の他に糖尿病と診断され、それから糖尿病の治療を行うようになり、現在に至っています。

糖尿病とは、大変やっかいな病気と聞いていますが、私は病気と共存共栄的な考え方で自分の体をコントロールし人生を歩んで行くことが大事かなと思います。それには医師の指導を素直に実行する事が、一番大事だと思います。

今後は、皆様方と共にこの病気を通して少しでも楽しい人生になるよう、進みたいと思います。

最後に、今後ともこの糖友会の運営に対して会員の皆様方のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げる次第です。簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。

編集後記

ようやく創刊にこぎつけることができました。

原稿を頂戴しました各支部の皆様にお礼申し上げます。

会報のネーミングを募集しましたが、応募がありませんでしたので、勝手に「ふくとう」と名づけました。

現在、編集委員ゼロです。どなたか手伝ってやろうという方を募集しています。また、今回記事を載せられなかった支部には次号を期待しています。

記事や作品を載せたいと思われる会員の方は、各支部を通して随時、原稿をお申し込みください。とりあえず年1回の発行を予定しています。

〈K.O.〉

各支部と会員数

医糖会(福井医科大学)50・済糖会(福井県済生会病院)62・糖友会(福井赤十字病院)79・福糖会(福井県立病院)39・あゆの会(福井社会保険病院)40・桜会(国療敦賀病院)92・アカシア会(公立小浜病院)23・市立敦賀病院253・町立織田病院5・糖池会(池端病院)54・たんぼ(尾崎病院)45・糖克会(金津 木村病院)44・つつじ会(鯖江 木村病院)33・笠原病院40・真田病院31・高糖会(高村病院)5・糖和会(春江病院)25・糖福会(福井総合病院)90・玉井内科クリニック18・中井内科医院100・平井内科クリニック5・細川内科クリニック5・病院栄養士協議会30

合計24施設、1,170名

(順不同 平成14年3月1日現在)